

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・油井正昭

はじめに

大正時代、公園行政の所管は内務省衛生局である。その内務省衛生局が国立公園創設に本腰を入れたのは大正九年（一九二〇年）である。この年衛生局は、国立公園候補地を全国に一六カ所選定した。ここから国立公園創設が本格的に動き出した。今年はそれから一〇〇年の節目の年である。

また、この候補地一六カ所の選定に当たったのは、後に国立公園の父と呼ばれることになった田村剛である。田村は明治二三年（一八九〇年）九月七日生れなので、今年には田村剛生誕一三〇年という節目の年でもある。

この二つの記念的な年に当たり、国立公園創設の歩みを調べると、内務省衛生局保健課の若い職員が

大活躍をしているので、そのことを述べようと思う。

国立公園候補地選びと実地調査

大正九年、公園主管課の湯沢三千男保健課長（三三歳）、潮恵之助衛生局長（三九歳）は、国民保健の上で国立公園の創設を考え、国立公園の識者である田村剛を囑託で採用し、国立公園にふさわしい地域を選定する業務に当たらせられた。田村は大正四年（一九一五年）に東京帝国大学農科大学林学科を卒業し、母校の講師、千葉高等園芸学校（現・千葉大学園芸学部）講師などをしてきたが、大正九年八月に内務省へ入った。入省のとき田村は二九歳だった。

田村は、著名な名勝地などから北海道に三カ所、本州九カ所、四国一カ所、九州三カ所、全国に一

六カ所の国立公園候補地を選んだ。一六カ所は阿寒湖、登別温泉、大沼公園、十和田湖、磐梯山、日光、富士山、上高地、白馬山、立山、大台ヶ原、伯耆大山、小豆島及屋島、阿蘇山、温泉岳、霧島山、を中心とする地域である。これらの候補地の調査が、大正一〇年六月上高地から開始された。

調査を行ったのは、田村と中越延豊（囑託）である。中越は田村の大学二年後輩で、卒業後明治神宮造営局で造園技術者として神宮造営に携わり、大正一〇年工事終了と共に内務省へ転じ、田村の指導の下で国立公園候補地の調査に従事した。このとき中越は二〇歳代後半である。

一六候補地の調査は、途中で田村が欧米へ国立公園の研究に出かけたことに加え、関東大震災や経済不況の影響があり、終了は昭和三年（一九二八年）になり、開始から八年もかかった。表1のように入省後は一六候補地すべての調査を行った。調査終了後、中越は各候補地の紹介を、「国立公園」誌に一六回にわたって連載し、広く国立公園を啓発した功績は大きい。

表1 国立公園候補地の調査

| 調査年度 | 調査した国立公園候補地 | 調査者 |
|----------------------|--|--------------|
| 大正10年度 大正11年度 | 上高地、白馬山、日光、温泉岳、阿蘇山、富士山、大台ヶ原、磐梯山 | 田村 剛 中越延豊 |
| 大正12年度 ～ 昭和3年度 | 阿寒湖、霧島山、小豆島、及屋島、伯耆大山、立山、十和田湖、大沼公園、登別温泉 | 中越延豊 |

国立公園法規の制定

国立公園候補地の調査が行われていた時期、まだ国立公園法規がなく、内務省は法規制定を急ぐ必要があった。

国立公園法規の検討は、昭和四年からである。昭和四年に東京帝国大学法学部を卒業した三浦義男が衛生局保健課へ入り、伊藤武彦課長に国立公園法規の研究を命じられた。三浦は入省早々の見習期間中で、研究するよう言われたが全く見当がつかなかったという。三浦義男は後に衆議院法制局長を務めた人である。以後国立公園法が成立する昭和六年三月までの二年にわたり、田村が欧米で調査、収集した資料、国内の都市計画法、

森林法、史跡名勝天然記念物保存法などを参酌して、保健課で法案の検討が行われた。草案は幾度も作り直し、書き直し、練り上げ、伊藤課長、田村囑託、小坂立夫囑託（昭和五年入省）、中越囑託らが、三浦と共に夏は炎暑にうだりながら、夜遅くまで勉強したと小坂が回想している。三浦も法案が衆議院、貴族院で審議された時期、深夜作業を相当たったと書いている。法案の検討が始まった昭和四年は、伊藤課長三八歳、田村三九歳、中越三〇歳代後半、小坂二八歳、三浦二五歳である。国立公園法規は、若い精鋭職員の知恵を集めて作成された。

国立公園区域設定調査

昭和六年に国立公園法が制定され、設置された国立公園委員会で、衛生局保健課が行った一六候補地の調査結果を基に、指定する箇所選定が行われた。審議途中で大雪山が候補地に加えられ、最終的に一カ所に絞られた。上高地、白馬山、立山は統合されて日本アルプスという候補地になり、登別温泉、大沼公園、磐梯山の三カ所は

選から漏れた。

一カ所の候補地は、昭和七年一〇月下旬から指定区域を定める実地調査が、富士山麓から始まり、翌昭和八年一月下旬まで一年をかけて行われた。区域設定は、保健課国立公園係の若い職員が総動員され、面積が小さい候補地で約一カ月、広い候補地は二カ月を超える日数を要した。担当した職員は表12である。田村を筆頭に、技術者が一六名も採用されていたことに驚く。大正から昭和にかけて、候補地調査に活躍した中越は、昭和六年九月に急逝したため、氏名がないのは残念である。

表-2 区域設定実地調査を行った内務省保健課の職員

| 氏名 | 区域設定実地調査を行った国立公園 | 公園数 |
|-------|---------------------------|-----|
| 田村 剛 | 富士、雲仙、霧島、吉野熊野、瀬戸内海、阿蘇、大雪山 | 7 |
| 黒田新平 | 富士、雲仙、瀬戸内海、阿寒、大雪山 | 5 |
| 小坂立夫 | 富士、雲仙、吉野熊野、日光 | 4 |
| 加藤誠平 | 富士、霧島、瀬戸内海、十和田 | 4 |
| 千家哲磨 | 富士、霧島、吉野熊野、日本アルプス | 4 |
| 戸坂 修 | 富士、雲仙、瀬戸内海、阿蘇 | 4 |
| 石原耕作 | 阿寒、大雪山 | 2 |
| 石井 勇 | 阿蘇、大山 | 2 |
| 稲垣龍一 | 阿蘇、大山 | 2 |
| 片岡俊一 | 日光、十和田 | 2 |
| 池ノ上容 | 日本アルプス | 1 |
| 菅沼辰太郎 | 日本アルプス | 1 |
| 森 蘊 | 日光 | 1 |
| 渡部紫朗 | 大雪山 | 1 |
| 高橋 進 | 大山 | 1 |
| 小林義秀 | 十和田 | 1 |
| 藤原孝夫 | 富士、瀬戸内海、大雪山、阿寒、十和田 | 5 |

注：藤原孝夫保健課長は各公園短期日の視察である

職員別に公園数を見ると、田村が最も多いが、田村は指導と区域の要所を決めるために現地へ行っている。黒田が五公園、小坂、加藤、千家、戸坂が四公園で、中心的な役割を担っていた。職員の入省年、昭和八年の身分と年齢を分かる範囲で示すと、田村剛（大正九年入省、技師、四三歳）、小坂立夫（昭和五年入省、技手、三〇歳）、加藤誠平（昭和六年入省、技手、二七歳）、千家哲磨（昭和六年入省、囑託、二六歳）、森蘊（昭和八年入省、囑託、二八歳）、池ノ上容（昭和八年入省、囑託、二三歳）、渡部紫朗（昭和八年入

省、囑託）、石井勇（昭和八年入省、囑託）、石原耕作（囑託、二七歳）、稲垣龍一（囑託）、黒田新平（囑託）、戸坂修（囑託）、高橋進（昭和八年入省、雇、二二歳）、片岡俊一（雇）、菅沼辰太郎（雇）、小林義秀（技手）、藤原孝夫保健課長（大正九年入省、事務官、三七歳）である。ほとんどの職員が二〇歳代である。

国立公園は、候補地選びと調査、法案作成、指定区域設定などで内務省衛生局保健課の若い精鋭職員が大活躍し、彼らの熱意で創設への道を歩むことができたのである。国立公園誕生は、昭和九年三月一六日である。

参考文献

- ・田村剛（一九三二）…中越延豊君の追憶、国立公園三（一〇）、三四
- ・三浦義男（一九四〇）…故伊藤武彦氏と国立公園法誕生時代、国立公園一（二）（一）、一一～二二
- ・小坂立夫（一九五二）…国立公園回想、国立公園二（一）、三〇～三二
- ・油井正昭（二〇二〇）…昭和初期の国立公園指定における内務省の区域設定と国立公園委員会の審議に関する論考、江戸川大学国立公園研究所年次報告第四号、一五四～七

油井 正昭 ● ゆい まさあき
 千葉大学名誉教授、江戸川大学国立公園研究所客員教授、前（財）国立公園協会理事長。